辰巳会創立二十周年回顧

大幡　久一

新年お目出度うございます。会員の皆様もお元気でよい年をお迎えなされたことと存じます。早いもので辰巳会の発足から二十年もの歳月が流れ二十周年になりました。

毎年四、五月の好季節に全国大会が開催されておりまして皆様それぞれ楽しく談合しておられる姿はまるで絵を見るようで辰巳会ならではの光景かと存じます。

その中から私の脳裏にしかと刻み込まれていますことを三つ四つ申し上げて見たいと思います。

昭和四十三年四月二日に供養塔除幕式が行われました光景です。永井さんが恭々しく除幕されますと麗な陽光の下にその端麗、荘重な全貌を現わし二五〇人を越える参列者の拍手は山内にこだまして暫し鳴りも止みませんでした。直く側にお家さんの胸像、墓碑と金子柳田両翁の頌徳碑がありまして、この塔を加えまして祥龍寺境内のこの一角はカネタツ聖地となりました。カネタツ創業以来、今日まで明治、大正、昭和の三時代に亘る多数の物故店員全員を合祉しその霊を慰めるとともに今日なお生存する我々の後生のためにもなると言はれた小野幹事の言葉は今もなお耳朶に焼きついています。

次に昭和四十五年五月七日奈良依水園でのお家さんの三三回忌、御主人の二七回忌の法要と辰巳会十周年記念大会であります。当日天気であれと幹事一同が天に祈った甲斐もなく強い雨降りで、出席者の足がはばまれるのではないかと心配したが会員諸氏が陸続として到着され二四五名にも及び会員の熱情に感じ入りました。法要の最中に雨足が一しきり烈しくなりその上に突風に襲われ天幕がゆさぶられ溜り水を叩きつけて一瞬列席者の胆を冷しましたが高畑会長は悠然として挨拶を続けられ無事に式を終了できました。幸い後半は天候回復不充分ながらも宴遊会が出来、池を前に若葉の木々を背に小高い丘で写真をとることもできました。

昭和五十年五月十五日辰巳会大会に於て西川支配人の頌徳碑はご愛孫郁子嬢の手によって華々しく除幕されました。幸いの好天気に恵まれて一層輝やかしくその偉容を全会員の前に現わし拍手がしばし止みませんでした。

この日の感激は今日でも忘れられません。建設委員長に選ばれ、碑文案・作製・碑文の揮毫までもしたことは何か深い因縁があるように思われて有難いことと喜んでおります。

昭和五十二年五月十五日、名誉ある解体と誰かがいった、あの日から数えて五十年の星霜を経た今日。鈴木商店回顧五十年の大会を京都国際会館で行い二一三名の出席者がありました。表敬のため高畑、永井両大長老にご起立をお願いし全員の大拍手をもってお喜び申しあげた異例の行事もありました。

本大会については神戸製鋼、帝人、日商岩井、太陽鉱工四社をはじめ各社から特別のお手厚いお援助をいただいたお蔭であんな盛大な行事を行うことが出来ましたばかりでなく相当の余剰金も残りました。心から厚く御礼申しあげます。またそれを大事に使わせて戴き今日に至っておることを申し添えます。

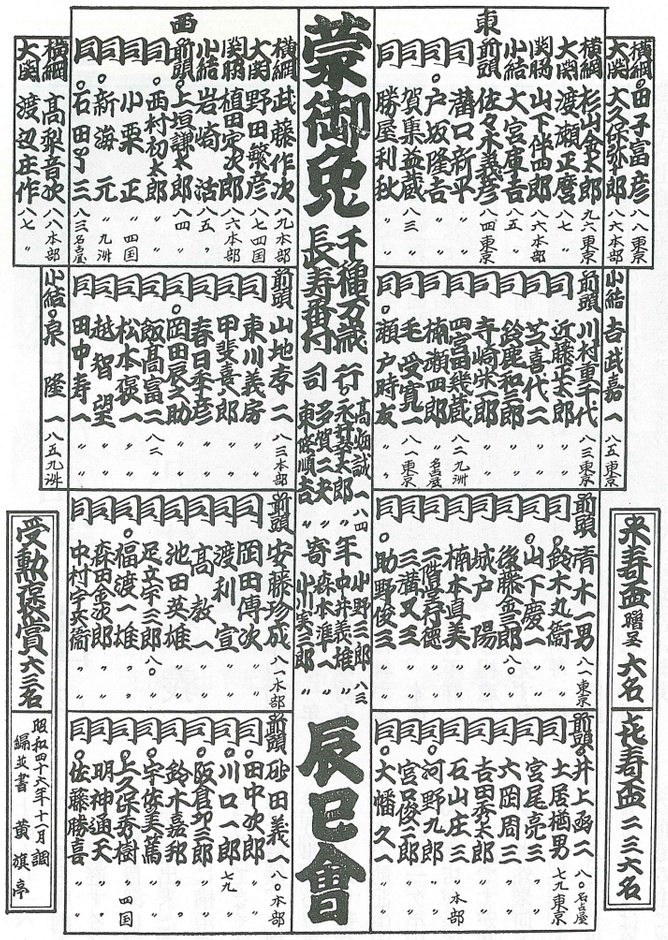
二十周年の大会については幹事に於きましていろ〳〵案を練っておりますが皆様からも何かよいお考を示して戴きますよう御願い申しあげます。

長寿番付余談

閑子

古い「たつみ」を見ていて写真のような長寿番付を見つけました。この番付には私の名が東の前頭のどん尻にのっています。当時帝人の連中からやんや言われたものでした。

物ずきの心から早速調べて見ると番付には八六人あるが生存者は〇のついた、二三人に減じています。



これを年齢別に分けると

年齢	人数
96	1
89	1
88	2
87	3
86	3
85	4
84	11
83	17
82	6
81	10
80	13
79	15
合計	86

となっています。

生存者の現年齢は

年齢	人数
97	1
95	1
94	6
93	2
91	3
90	3
89	7
合計	23

五十四年度の番付を見ますと、永井、鈴木、大幡の三人は行司欄に、他の人々は全部横綱、大関、関脇で東西の第一位を占めている。序にこの番付を年齢別で示すと次の通り。

年齢	人数
96	1
95	2
93	1
92	7
91	4
90	2
88	7
87	9
86	12
85	17
84	15
83	24
82	20
81	19
80	29
79	27
78	26
77	36
76	27
合計	290

この番付の七十九才以上の合計は二〇一人で前の八十六人と比べると一二五人も増えている。日本が世界一の老人国になっている姿がここにも如実に現われていると言ってよい。

◎原稿募集

内容　随想　短歌　俳句　絵画
詩　写真　鈴木往時の思出
などを

必ず原稿用紙に縦書で　四百字詰
五枚程度

締切　昭和五十五年十月末日

送先　神戸市生田区京町七二
太陽鉱工㈱内
「たつみ」編集部宛